「諏訪之島小・中学校の八月踊り伝承活動の取組」

１　学校名　　十島村立諏訪之瀬島小・中学校

２　学年・人数　　全児童生徒 16 人
小学部１年２人　２年３人　３年１人
４年２人　５年１人　６年２人　計 11 人
中学部１年２人　３年３人　　　　計５人

３　日時・場所
（１）練習の日時・場所　　特になし
（２）発表の日時・場所
・平成 29 年８月 13 日　公民館　迎え盆踊り
・平成 29 年８月 15 日　公民館　送り盆踊り
・平成 29 年９月 25 日　公民館　新節の踊り
・平成 29 年９月 26 日　公民館　新節の踊り
・平成 29 年 10 月１日　公民館　柴挿の踊り
・平成 29 年 10 月２日　公民館　柴挿の踊り

４　伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能，伝統行事について
（１）　名称　八月踊り（はちがつおどり）
（２）　由来
この諏訪之瀬島では，奄美大島北部の笠利町の伝統的な文化や生活習慣を受け継いでいる。その中で八月踊りは，奄美大島全域で伝染病が広がり，それに加えて天災や地震が起こり，その被害は大変大きかったため，沖縄の王に相談したところ，祭りにより祟りが解かれるということから，八月踊りが始まったとされている。８月節供は，考祖祭といって，新穀を神前に供え，先祖を祭り，五穀豊穣を祈るのである。考祖祭は，新節（あらせつ）と柴挿（しばさし）ととんがに分け，これを三八月（みはちがつ）と言っている。新節は新節で８月最初の丙（ひのえ）の日に行う。新米で作った「キミ」と「カシキ」を備えて火の神を祭り，豊年を祝う。丙の前日すなわち乙（きのと）の晩から部落隅々まで一軒も残すとろなく夜を徹し２日３日踊り歩く。これをヤサガシというが，現在は行われていない。柴獅（しばさし）は新節から中７日おいて乙にツカリ丙に祭る。畑や屋敷の隅に柴（すすき）を立てて悪神を払う。
（３）　構成

自治会の行事の１つで公民館に集まり，囃子の方（男女３人くらい），太鼓（女性のみ）踊り手（その他全員）が１つの円を作り，囃子の方の歌に合わせて太鼓がなり，踊り始める。囃子の方の男女がそれぞれ掛け合いし負けないように競い合う。その競い合いに乗じてテンポがアップすると踊りもテンポアップして踊り方のリズムに合わせた踊りが要求される。この囃子の勝負が決し

たら踊りが終わる。この勝負を２～３回する。つまり，踊りを２～３回くらい踊ると休憩をしてまた踊り始める。これを１時間 30 分くらい行う。

５　保存会や地域との連携の具体

特に保存会はなく，個人でビデオを撮り覚えたりしている。地域との連携も特にない。学校へ保存するための取組などの依頼もない。八月踊りの場で見よう見まねで踊りを覚えている。ただ，囃子についてはしっかりと伝承する必要性を感じる。また，郷土教育の観点から，総合的な学習の時間や道徳の時間などを活用し，地域の方をゲストティーチャーに活用したり，児童生徒自ら出向いてインタビューし，由来や意義などを学ぶと共に，文化祭等で演舞するなど発展的な取組も期待できる。

６　文化財伝承・活用の取り組みの工夫した点

学校だよりに八月踊りの由来や参加の呼びかけを行った。

７　取組の様子（練習状況，発表の場等）

構成に記述したとおり。

８　参加児童生徒・保護者・保存会・教員等の感想・意見

（１）参加児童生徒

・　この芸能を伝承し続けていきたい。八月踊りの囃子にも挑戦したい。
・　振り付けや歌詞の意味を調べてみたい。
・　旧盆の意味を調べてみたい。

（２）保護者

・　見よう見まねでどうにか参加しているが，島の一体感を感じる。
・　囃しを覚えようと挑戦している。意味はまだ分からないがこれからもこの伝承芸能を大事にしていきたい。
・　後半の踊りが難しいが，来年はしっかり覚えて子どもに教えられるようになりたい。
・　このような文化が脈々と受け継がれていることに驚いた。島民の一員となったので自覚して参加していきたい。

（３）教員

・　初めて参加したが，月夜の晩に囃しや太鼓が響く幻想的雰囲気に酔いしれた。小さな集落だが，このような素晴らしい郷土芸能があることに驚いた。来年は是非踊りを覚えて参加したい。
・　３年目の参加になるが，子どもたちも違和感なく踊りに参加している。これこそが，郷土愛を育む営みだと実感した。
・　踊りを見て，奄美が発祥の証だと思った。初任地が奄美大島だったので親しみを覚えた。踊りの最後は六調で締めくくるところも同じ。自然と指笛を鳴らしていた。来年も積極的に参加したい。